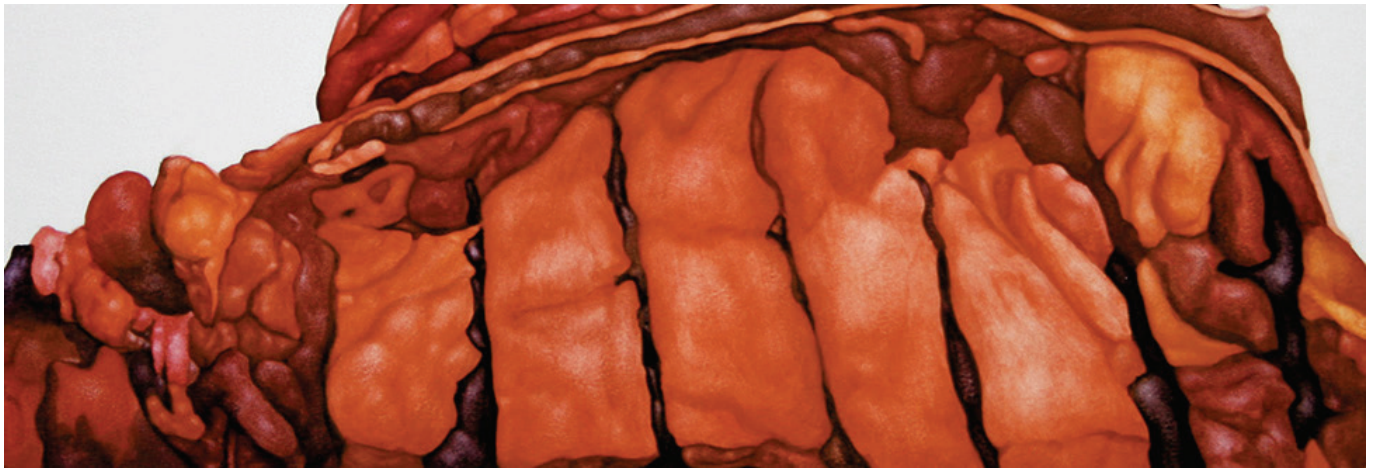


現代美術家3名による、食をテーマとしたグループ展「美術食堂」。絵画・立体・映像等で構成。



普遍的であると同時に、近年の安全性問題や教育の一環としても、特に関心が高まっている「食」をテーマとした展覧会。生きとし生けるものが日々なんらかの形で繰り返している食。それは必ずしも生存するため、食欲を満たすため、食べる快楽を味わうためとは限らないだろう。あるいは真逆の、食べて吐き出すため、過剰に食べて苦しむため、死に至るためという場合さえも有り得る。また、私たち自身が生きるために何ものかの死を必要としていることも避けては通れない。食とはそのような不条理を含んだ多義的な行為である。本展は、ありふれた日常に潜む食の問題や、現代における食のあり方を、食をテーマにクリティカルな作品を制作している作家をピックアップして構成するものである。

「美術食堂」展

日時：2015.5/31(日)～6/28(日) (開廊日：5/31、6/7、6/21、6/28) / 各日13:00～18:00

会場：ART SPACE ZERO-ONE (アールスペース ゼロワン)

大阪府大阪市北区豊崎4-9-16白苑ビル31 〒531-0072

<http://kenichi-takasu.com/zero/>



【お問合せ先】

美術食堂

TEL：090-5349-1389 (新宅 シンタク)

mail：info@bijutsushokudo.com

現代美術家3名による、食をテーマとしたグループ展「美術食堂」。絵画・立体・映像等で構成。

笹山 直規 NAOKI SASAYAMA <http://naokisasayama.com/>

笹山直規は、テキサスの死刑囚が刑執行の前日に食した『最後の晩餐』を描く。これはアメリカで絞首刑の公開が行なわれていた時代からある死刑制度である。「生」を最大限に実感する効果的な手段であり、また個人の記憶を司るものである。□食べきれないくらいの豪華な料理を要求する者もいれば、コーヒーを一杯だけ、など質素な晩餐もある。中には意味深なメッセージを持たせり、宗教的な儀式の□ために必要なメニューをリクエストした者もいた。それら死を受け入れた者達の『肖像画』として表現されたシリーズ作品である。



新宅 睦仁 TOMONI SHINTAKU <http://tomonishintaku.com/>

新宅睦仁はファーストフードをモチーフに作品を制作している。牛丼やカップヌードル、コンビニ弁当等の身近な食べ物を組み替え、単純明快だがシニカルなイメージを作り出す。牛丼やカップヌードルを落下させ、自然界の滝のようにして描くことで、味わうことなく猛然と胃袋に流し込まれる現代人の食の実態を可視化したり、日々廃棄されるコンビニ弁当を山のように積み上げ、そこに日本的な米一粒にも神を見出すアニミズムをからめて、コンビニ弁当の山というご神体として表現したりするのである。



祐源 紘史 YUGEN HIROFUMI <http://www.yugenhirofumi.com/>

祐源紘史の作品の多くは食べ残した肉の骨や残骸、ファストフードのパッケージなど、食べる行為を経て残ったもので構成されている。また、既視感を与える形態を特徴とし、一見ポップな趣向を凝らしながらも、恐怖や不安といった感情を抱く要素を含んでる。KFCフライドチキンの骨を洗って人体骨格として再構築した《KFCシリーズ》の姿はあまりに滑稽で、時に恐ろしく、私たち鑑賞者に問いかけてくるようだ。「私を食べて」その言葉の主は鶏なのか、カーネルサンダースなのか、また、大量消費の果てに残った私たち自身の姿なのか。

